

Great Jove with conquest crown'd the Trojan band.

Ajax no more the sounding storm sustain'd,

So thick the darts an iron tempest rain'd:

On his tired arm the weighty buckler hung;

His hollow helm with falling javelins rung;

His breath, in quick short comings, comes & goes:

And painful sweat from all his members flows."

此の時しも希臘はいよく危く見えたりけり。あはれいでやオリムポス山を守れる詩の神々よ。トロイの兵火の竟に希臘の軍艦を焼きうつに至りにし一伍一什を語りませ。

されば敵將ヘクトルは大きなる劔をうちふりて敵を防がんとしたるアジャックスが槍の身を柄元よりぞ切り折りける。さしも猛きアジャックスも此の神業に驚きつゝおぼえずもたぢく退るほどにトロイ方は勇みたち忽ち軍艦に火をかければ炎焔急に擴がりて船尾にうづまく黒けぶり物すごくまたおそろし。

アキリーズは其の太髓をはたとうちて疾うく急げバトロクラス。はや軍艦に火のかゝつたるぞ。足下は我が物具を身に着けよ。我れは兵士を招集してん。アキリーズはかくいひすて、馳せいでければバトロクラスは急ぎまづ其の脚には美しき履をはき其の胸には斑に彩りたる星の紋ある胸甲を當て肩よりは銀作りの劔を懸け下し大なる楯を掻き其の頭には馬毛の飾ある兜を戴き二柄の槍を左右に取りて二頭の駿馬を曳出づればアキリーズはミルミドンの猛卒を召しつどへバトロクラスを繞りて整列せしめさて總勢を五隊に分ち各隊に一人の長を置き第一隊にはメテテウス第二隊にはユードラス第三隊にはピサンクル第四隊にはフェニックス第五隊にはアルシミドンさてバトロクラスは總督たり。アキリーズは其の中央に立ちて嚴に號令していはく

汝ミルミドンの勇士等よ。我が憤怒してありし間に汝等頗るトロイ兵を罵りおどし且我が不誼をそしりしことを忘るゝな。汝等我れを離れていへらく嗚呼ペリウスの残忍なる子よ一定汝の母は忿怒の程に汝を養育せしならん。嗚呼不仁なるかな汝は汝の親黨が義に勇めるをも強に制へて眼はさらしむ。汝かく不義の怒に執着せる上は是非なし。せめて吾がさしをがらなして本國に歸らしめよ。かくなん汝等は寄り集ひて腰、いひし。今こそ汝等が樂へる闘戦

の期は來たりつれ。前の言を忘れずは今し目ざましき働せよや

ど。かゝりしかば士氣大に振作し隊伍は蕭々と整ひ兜と兜と重なり楯と楯と列なり人と人と相摩したる恰も幾千の石を積み疊みて凌雲の大厦を築きたらんが如し。パトロクラス即ち之れが先鋒となりて進みいづ。さてアキリーズは帷幕の裡に入りて美しく飾れる箱の中より奇しき細工したる酒杯を取出し硫黄をもて其を淨めやがて自から手を洗ひて黒酒を注ぎ天を仰ぎて「ヨロイ」に捧げ且つ祈禱すらく「天に在ませるヨロイ」よ。大神靈に我が祈願を聽かせて我が耻辱を雪ぎ希臘の民を窘めさせ給ひてき。おはれ再びわが願言を容れさせ給へ。今しも我れ我が黨の一人をして夥多のミルミドン兵をめて出陣せしむ。願はくは彼れに功名をせさせ給へ。彼れが膽を太くたくましくせさせ給へ。吾が従類すらもかばかり兵事に明なるを彼のヘクトルに知らせまほしくなん。二つには彼れが軍艦の騷擾をしづめ得ば疾く彼れを其の黨と共に我が許へ歸り來させ給へど。アキリーズはかく禱りけれども「ヨロイ」は其の願の一を聽きて其の餘をば納れざりけり。かく禱り終へて後アキリーズは徐に帷幕の外に出で、激戦の光

景をぞ打眺めける。

かくてミルミドン勢は勇氣凜々と列を正して蕪地にトロイの陣頭に衝き入りたるさながら怒り立てる蜂の群の其の巢より湧き出でたらん如くなりけり。さて總督パトロクラスは味方を顧みて「我黨の君を仰げるヘリウスの子の譽を揚げよ。またアガメムノンをして其過失を悟らしめよ」といど高らかにくりかへし呼びひける。トロイの兵士等はパトロクラスの四邊もまばゆきばかりなる扮装を見てさてはアキリーズが怒どけて出陣したるかと思ひければ大に駭き心おくれ騒ぎたち隊伍をも亂して我先にと逃途を求めまくす。さればパトロクラスは先づフエニアの大將某をうち取り頻に勝に乗りて竟に軍艦より敵を逐ひ今や炎々と燃上らんとしたりける楯をば忽ちに消しどめける。されど一隻の軍艦はなかば、かり焼け落ちたり。かゝりしかば希臘人は初めてほど息を繼ぎぬ。さはれトロイ人はなほ退かで陥み止まりつゝ戦へり。此の時希臘の諸將はあの敵一人づゝを討取りけり。即ちパトロクラスはアリロカスといふものゝ太腿を薙ぎメテレアスはトリアスの胸を突きテストルの子アンチロカスはアテム

ニウスを撃ちぬ。又アジャツクスはクレテアラスといふを擒にして其の首を刎ぬメリオチスはアカマスといふを戦車より墮落しアイドメニウスも又手柄をあらはしぬ。此の時しもヘクトルは牛の革の楯にて身を覆ひてしばらく防ぎ戦ひてありけるが味方次第に崩れたちて逃げ走りうめき叫ぶ聲に其がのりたる駿馬おどろきやがて彼れを負うたるまゝ逸し去れば其の部下今は一となだれと爲りて馬は主の車をすて一散にトロイ城の方へと駈けいだす。パトロク拉斯はますます勇みて當たるを幸に薙ぎ倒し斬り拂ひ濠を越えて敵の後を追ひゆく。譬へば太神のいたく怒らせて津浪を起こし山を裂き田を漂はせてそを悉く大海原へ押流すらん時の如くに人馬の叫喚の中にトロイ勢はまたも軍艦の方へひたくと驅り立てられき。かくてトロイの勇士の討死するもの數を知らず。爾時(そのとき)ヨイザの子サルピドンにはがみをなしリシア兵を罵り勵まして自から戦車を飛下りて敵に駆け向かふ。パトロク拉斯そをかけ迎へて恰も一雙の鴈が互に爪を鋭ぎ嘴を鋭くして崑頭に闘へるが如くに高く呼ばひつゝ打合ひけり。ヨイザ遙に是れを見てシエノ一神に向かひていふあなうたて。今しも我が最愛のサルピ

ドンはパトロク拉斯の爲に討たれなんとす。これ彼れが宿命なり。いかにせまし我が心まどへり。彼れを此の大難より救ふべきか救はでパトロク拉斯の心のまゝにせんか。シエノ一應ぶらく御言(ごごん)ともおぼえぬかな。敢て宿命をも曲げさせんや。我れなどかどいめ侍らん。さはあれ大神もしほしいまゝにかゝる依怙(よこ)を行はせて命の定まれるサルピドンを救はせなばこの後他の神も皆宿命に逆ひて其の愛子(まなこ)をば助けんと希はんずらん。大神まことにサルピドンを愛しとおぼさば寧ろ今パトロク拉斯が刃の下に倒れさせさて後に死と愛らしき睡眠(いびん)を彼れが許に遣りて彼れが靈魂と命とを徐にリシアの地に護送(ごそう)させよ。是に於てヨイザは其の言に従ひて愛子の譽のために鮮血(あざ)の雨を降らせけり。さて兩勇士の相近ける時パトロク拉斯はまづ敵の郎黨一人を突倒す。次にサルピドンは長槍もてパトロク拉斯を突かんとせしが果たさず却りてパトロク拉斯の操り出だす鎗に貫かれて樵夫の斧に伐られたる大木の幹の如くに地にまるびぬ。かくて血に塗れ齒がみをなしグラウカスを顧みていへらく我が友グラウカスよ。足下(そなた)願はくはリシアの勇士を奨励して我がために敵を防げ。希臘人をして我が

物具を剝取らしめば我れ永く足下を怨むべしといひく息絶ゆ。クラウカスは其の友の聲をば聞けど先にチウサルのために其の腕を射ぬかれぬれば往きて助くること叶はず身もだへして苦しめり。すなはちアポローを禱りていはく我れかく深手を負ひて疼堪へ難く進みて敵と戦ふこと叶はず而して剛勇サルピトンは討たれたり。あはれ大神彼れの死骸を齎り得んために我が疾を癒やさせよと。アポローの神打聽きて直に其の疼を去らせ且つ精力を吹込みけり。かゝりしかばクラウカスは勇氣忽ち奮に復しリシア並びにトロイの諸將を勵まして急にエニアスとヘクトルとの傍にゆき足下等なかくは傍觀したる。サルピドンはすでにバトロクラスの手に斃れき。豈ミルミドン兵をして其の物具を剝ぎ其の屍を汚さしむるに忍びんやといふ。トロイの將卒かくと聞きて深く悲しみ一同ヘクトルに従うて進撃す。此の時バトロクラスはアヤックス兄弟に向かひていでや敵を逐ふことを我黨の快樂たらしめよ。眞先に我が壁を破りし敵將サルピドンは倒れつるぞ。速に彼れが物具を剝ぎて彼れを救はんとする敵黨を擧取れやと。こゝに於て兩軍は激しくサルピドンの周圍に血戦す。ヘクトル勇を奮ひ

てミルミドンの一名士を擧取る。トロイ勢やゝ勢を得たり。バトロクラス大に怒りて隼鷹の鳥をかけんとしたらん如く蕪地にトロイの軍中に衝入りて其の一將をうちとる。トロイ勢また色めく。此の時クラウカスは希臘の一將を斃しメロオテスはトロイの一英雄を殺すエニアスすなはちメリオテスを目かけて突きかゝりしが甲斐なかりき。さればエニアスは大に焦ちてメリオテスを罵り彼方もまた罵りかへす。此の折からバトロクラス走り來て足下などてかくは無益の舌を弄するぞ。戦陣の要は腕に在りて舌にあらざとたしなむ。かくてまた兩軍激戦す。槍劍の音鏘鏗屍山血河累々滾々。サルピドンの屍は其の間に埋もれて殆ど見分き難きに至りたれど兩軍の將卒はなほ恰も牛乳をもりたる器に蒼蠅の群りたらんが如くに其が周邊に群りて戦ふ。此の光景を見たりけるヨヨウの神は今直にヘクトルをしてバトロクラスを殺さしむべきかはた今しばしばバトロクラスを活け置きて手柄をせさせんかとしばらくは思ひ惑ひたりしが竟にトロイ人を一たび其の市城まで退かしむべしと心を決しまづヘクトルに恐怖の念を起こさせやがてトロイ人の心を動かして共に逃げ走らしむ。猛勇なるリシ

ア兵すら今はを留まらざりけり。さればパトロクラスは竟にサルピドシの肩よりかゝやける黄銅の鎧を剥ぎ取りて其の黨にわたす。爾時ジョーザはアポロに命していふ汝疾く往きて血に塗れたるサルピドシの死骸を引出だし遙かなる流にゐて行きて悉く洗ひ淨め神油もて之れに塗り死と睡眠とに命じてリシアの國にゐてゆかせよ。さすれば彼處にて彼れが外族家族彼れが爲に墳墓を築いて葬儀を行はんと。アポロ命を奉じて天降りやがて其の如くに行ひけり。さてもパトロクラスは其の身に厄難の近けるをえも悟らでなほ勝に乗りてトロイ兵を追ひうちす。彼れアキリスがいひつけを守りしならばその災厄をば免るべかりしに不覺なりしこと共なり。そもくジョーザの神のはかりごとは入力の企て及ぶところにあらず彼れはよく勇者を走らし怯者を起たしむ。あはれパトロクラスよ神々におびきいだされて汝が死地に臨みける時汝が討ち取りし敵の猛者は誰々ぞ。第一にアドラスタス。第二にアウトラス。第三に誰れ。其の次は誰れ。彼れは皆此等をば打取りぬ。且彼れは三たびまでもトロイの城壁に上りけるが三たびまでもアポロの神のために劇しく刎ねかへされつ。其四

たびめに及びし時彼の神大喝して此の大都府はアキリスすら尙よく落し得まじきものぞ。况や汝をやと叱しければパトロクラス恐れおのゝきて遙に退く。此の時ヘクトルはスキアン門のほとりに馬をどいめて如何に進退を決すべきかどうち案じてありける所にアポロの神彼れが伯父アウウスと化して出で来ていふアポロの神汝を護らせ給へば疾くパトロクラスへ馬頭をむけよと勵ます。かゝりければヘクトルは他の希臘人には目もかけず只管にパトロクラスを目がけて突進す。パトロクラスかくと見て戦車を飛下り大なる石を捧げ上げておめいてヘクトルが方へ投げゝるが其の石ヘクトルが戦車の馭者にあたりてそが兩眼飛び出で車より轉びおちて死にけり。ヘクトルかくと見るやつと戦車を飛下りてパトロクラスと馭者の屍を争ひぬ。其間に恰も深谷の間にて東風と西風とが落合ひて老樹古木のこれが爲に裂かれ其の幹と枝とが相うつ音の物すさまじきが如くに兩軍たけりにたけりて相戦ふ。まばらくは勝負何れとも分かさりけるが日の漸く西天に傾きけるころ希臘勢遂に勝を得て馭者の屍をば牽去りける。此の時パトロクラスは三たびまで敵中に突入りて九人の勇士を討取りしが其の

四たび目こそは彼れが運の極みなりけれ。此の時しもアポロの神は身を闇黒のうち隠しつゝ平手もて彼れが肩と背とをうちければ彼れが目は忽ち眩みぬ。次に神は其が兜をうち落し血と芥とをもて其が馬毛の飾を汚し其の槍をたゞ中より打折り其が巨楯を地に落させ刺へ其が胸甲をも解き去りければパトロクラスはさながらゆめ見たる心地して足たゆみて戦きつゝ立てり。此躰を見たる一人のトロイ武者投槍を取りて彼れに投つけしが彼れを倒すには及ばざりき。されどパトロクラスは神力に恐れをなして味方の陣へ引き退かんとしたり。ヘクトル急に駈け来て長き槍をもて彼れが腿の凹の間を突通しければパトロクラスこらえずして倒れけり。希臘人傷み歎くこと限なし。ヘクトル大に誇りて呼ばふらく「嗚呼なりやパトロクラス。汝一定我が市府を打壊して我が婦女を擽にしめて歸らんと思ひあがりたりしならん。さもあらばあれヘクトルが駿足中を飛びて速く来て救ひつれば汝が望は盡餅となんぬ。不幸のをのこや。汝やがて鷗の餌食となりなん。恐らくは汝が出陣しける時アキリースは汝に向かひてヘクトルの鎧に血痕を見たらんまで艦に歸るなどいひつけん。彼れアキリース勇

なれど遂に汝を救ふこと能はず。嗚呼なるかなど。かゝりけれども嗚呼パトロクラスよ。汝は少しも屈する色なくたえくゝなる息の下より其の時かくなん答へたりし。汝今こそは廣言するを得べけれ。ヨイヴとアポロとが助力して汝に勝を與へつればなり。されどそは汝が功にあらず。汝が如きは二十人一度に向かはんとも我が槍能く之れを斃すべかりしを。我が今亡ぶるは神の所爲なり。我れ如何ともする能はず。さりながら汝深く心に念へ。汝も違からでアキリースの手に死すべきぞ。汝が命已に通りぬといひをはりて息絶えけり。ヘクトル死骸に向かひていふ汝我が滅亡を豫言すといへども誰か知らんアキリースはた我が槍先にかゝりて命を落すらんをぞ。すなはち突きこみたる槍をつと引抜き更に敵中にぞ突き入りける。

第十七卷

アトリウスの子メテレアスはかくと見て跳り出でパトロクラスが屍を打護りて大におめき楯を八面に翳して近寄るものあらば一突にせんと身構へける。此の時トロイ方に名槍の譽あるユーフォルパスといふ者いで来て「退れメテレアス其

の屍は吾が分捕するにまかせよ。我れ今第一の功名せんとしたるに手向ひせば汝が命はなからんと罵る。メテレアス叱して曰ふ、あな片腹いたし。似而非廣言をな吐きそ。汝が同胞ハイベルノールすら我れを嘲りければこそ立地に命を失ひつれ。汝そを憶はゞ疾く退け。ユーフォルバス大に激しいで我れ汝が首とりて彼れが遺族の鬱憤を晴してんと罵りやがて互に槍を打ふりて挑みけるがユーフォルバスの少しひるみて退くところをメテレアスすかさずおひすがりて其の咽喉をぞ突きとめける。此の有様に怖れて敢て進まんとする者なかりけり。さる程にメテレアスが彼れの物具を剝がんとしける時アポロの神急に天降りてヘクトルを呼起こしていふ、汝徒にアキリスが戦車の天馬をば追はんとしたれど彼の駿足は所詮人間の業にては御し得がたし。汝無益の勞をなせそ。ユーフォルバスが其の間に空しく討たれしをまだ知らずや。ヘクトル驚きて彼方を見やればげに一人は血に染みて倒れ一人は今しも其の物具を剝がんとしたりき。ヘクトルすなはち蹶然と奮進し群れる人馬を押分けてさながらヴルカンの不斷炎のやうに走り近く。メテレアス逸早く是れを見て太息つき自ら其の心に語る

らく我今此の美しき鎧とパトロクラスの屍とを見捨て退かば一定希臘の將卒等慣るべし。さりとして踏止まらば大敵たちどころに我れを圍まん。そも如何にせまし。神のめでさせ給へる英雄と戦はんはなほ神に刃向はんが如くなれば滅亡は靦面ならん。戦ふべきにあらじ。よし我れ今ヘクトルを避けて退くとも味方強に我れを咎むべしやは。むしろアシャックスと合體してさて後に進まんかと思案いまだ定まらぬうちにトロイ勢はや鈍々と寄せたり。メネレアス無念ながら引退き彼方なるアシャックスのほとりへゆきて呼ばふらく、パトロクラスの鎧はヘクトルが剝取りつるぞ。せめて其死骸をだにアキリスに送りかへさんに疾く來て助力せよと。やがて諸どもに元の處へ馳せ向かふ。ヘクトル今しもパトロクラスがかゝやく鎧を剝取り屍をも牽去りて其の首を刎ねんとしけるにアシャックスさながら韋駄天の如く駆け來て高塔のやうに其の前に衝立ちければヘクトルおぼえずたぢくと後ずさりして急ぎ戦車に飛びうつり鎧を從士に渡すうちにアシャックスは大楯を擁してパトロクラスの屍を護りメネレアスは愁然として其が傍に立てりけり。是を見たるリシアの大將グラウカスはヘクトル

を罵りていはく「あはれ丈夫の姿はあれど丈夫の魂なきをのこ哉。ヘクトル、足下が譽は虚しき名のみか。あはれサルピドンを敵に殺させて顧みざる不義のこのこや。もはや我が一黨は足下の爲に戦ふを屑とすまじきぞ。蓋しトロイ人の力のみにては此のトロイ城は支へがたかるべきに。トロイの没落は期すべきのみ。いふ甲斐なきをのこ哉。さはいへど足下等今赤心を傾けて國のために戦はんの勇あらば我が一黨加勢してパトロクラスの屍を牽きもて來ん。さはれかくいふも益なしや。アジャックス一たび現るればヘクトルは怖れて逡巡す。ヘクトル大に奮激してこはリシヤの賢將が言にも似ぬかな。ヘクトルがアジャックスを恐れて退き避くどや。虚妄の至極なり。我れは千軍の電掣萬馬の雷轟をも怖れざるをや。などて一アジャックスを憚らん。志かはあれど測り知り難きはヨロヅの神の神慮なり。彼れは強をも折き猛をも折く。勝敗は豫め期し難けれど是非思ふに違わらず。いで／＼今一と戦して我が剛勇の證を示さん。かくてヘクトルは味方を鼓舞し懸て被たる鎧をばぬきすて、アキリスが鎧をぞ着しける。ヨロヅの神は遙に是のさまを見て頭を搖かしつゝ獨語すらく「あはれ不

幸の見や。今命運の近きぬるを知らで人間無双の英雄アキリスが不壞鎧をまどひたる憫むべきかな。好し今一たび汝に譽ある勝を得させてん。されど汝が妻アンドロマキイが嬉し涙にくれて再び汝を迎へ鎧を受取るとはなかるべきぞ。さるほどにヘクトルは勇力四肢にみち／＼て其の扮装のきらびやかなる、さながらにペリウスの子どもぞ見えたる。さて味方の諸將に向かひて宣らく「遠近同盟の勇士等よ。我が其のはじめ足下等を囑集めたる、徒に兵の衆きを誇示せんが爲ならんや。トロイ國人の妻孥を護りて共に戦はんがためなりき。足下等すでに我が國人の贈與に飽きたり。今豈成敗の決戦に従はざるべけんや。パトロクラスの屍を牽きもて來ん者には我れ功名の半を頌かたん。榮辱一に此の一戦にあるぞといふ。かくと聞ける一同の勇氣は奮ひ起こり齊しく槍をあげて突進す。此の時アジャックスはメテレアスを顧みていふ「いかに我が友。もはや我が黨の運の極みぞ。今や危きものひとりパトロクラスの屍のみならず我が黨の身はた心元なし。見よヘクトル疾風迅雷を起こし萬象を覆うて寄せ來。疾く味方の勇士を集へよ。メテレアスすなはちやをれ味方の將校。パトロクラスの屍將に

トロイの狗の餌食とならんとす。出會くと呼ばふ。其の聲に應じて少アッヤ
 ックス、アイドメニウス、メリオテス等を先に希臘の勇將猛卒劔戟を提げて疾走し
 來たる。其の數幾許といふを知らず。さてトロイ兵もまた隊伍を固うしヘクト
 ルを將として來たり逼る。俄然として大津波の寄せたらんがごとし。此の時し
 もアポロの神急にパトロクスの周邊を取捲ける希臘兵の兜に密なる霧をふ
 りまきければトロイ兵これに乗じて難なく彼等を逐拂ひ競うて屍を牽き去ら
 んとす。アッヤックスかくと見て突いて入り獅子の群犬を逐散らすらんやうに右
 に左にトロイ兵を薙き拂ふ。折からヒッポタスといふ者繩をパトロクスの脚
 につなぎ彼方へ牽きもて行かんとす。アッヤックス飛びかゝりて打倒す。これ
 より亂戦となりて到底トロイ兵散々に破れイリアムの城内に逃入らんとしたり
 し時アポロの神傳令使と化して天降りエニヤスを呼び起こして宣り勵ます。
 こゝに於てエニヤス味方に向かひ大神が冥助の靈告ありしぞ。人々よパトロク
 ラスの屍をな動かさせぞ。進めくと呼ばひて前列に衝立ち立どころに一人を
 斬る。之れより又激戦となり黒き血汐地を漂はせ骸積んで丘を築きぬ。兩軍の

戦へるや猛焰の狂へるが如く山川濛々天地漠々日月も爲に光を失ひたるかど見
 えけり。

Fierce as conflicting fires the combat burns,

And now it rises, now it sinks by turns.

In one thick darkness all the fight was lost;

The sun, the moon, and all the ethereal host

Seem'd as extinct: day lavished from their eyes,

And all heaven's splendors blotted from the skies.

Such o'er Patroclus' body hung the night,

The rest in sunshine fought, and open light;

Unclouded there, the aerial azure spread,

No vapor rested on the mountains head,

The golden sun pour'd fourth a stronger ray,

And all the broad expansion flamed with day.

Dispersed around the plain, by fits the fight,

And here and there their scatter'd arrow light;

But death and darkness o'er the carcase spread,

There burn'd the war, and there the mighty bled.

此の時に當たりてスラシミアスとアンチロカスとはパトロクラスが戦死せしをも知らず彼方にありて血戦せりき。又艦中にとどまれりしペリュッスの子アキロースもかゝる變のありとは知らず彼れ程なく恙なく歸り來べしとのみ思へりけり。

さてアキロースが戦車の天馬どもは其の主の目前に戦死したるを見て鳴き悲むと人に異ならず。御者オートメドンが或は鞭うち或は手綱搔繰りてさまざまに嘸しつ嚇しつすれど動かばこそ果は首をうなだれつゝ墓石のやうに立すくみ彼等が兩眼よりは熱涙濺ぎおちて塵に塗れけり。ディオウの神大に憫みて自語すらく「あはれむべき不老不死の駿足や。汝等はなぞて無常のペリュッスに與へられけるぞ。人間と共に艱苦を味はんためかまことに地上に生けるものゝ中に人

ばかり淺ましきはあらじを。さもあらばあれ痛くな嘆きそ我れ今汝等に勇氣を吹込みやがてオートメドンを乗せて軍艦に歸らせてん」と。どかくするうちに不思議や天馬は忽然として奮ひ起ち砂塵を蹴りて馳けいだし猛然として戰場を駆けぬけんぞす。オートメドンいかで此の如き天馬を御し得べき。すなはちアルキミドンをして手綱を取らしめおのれは徒歩して進みゆくをヘクトル遙に見てエニヤスに向かひアキリスの天馬が未熟なる御者を乗せてあしこを行く。いで生擒にせん」と。大に勇みて突進す。クロシウス、アレタスの兩士従ひけり。此に於てオートメドンはアルキミドンを戒めて天馬を我が傍に控へさせアシャックスとメテレアスとを呼びて援を求め自らも槍をふりてまづアレタスを突き倒す。アシャックス馳せ來て應援す。かゝりしかばヘクトル、エニヤス、クロシウスはアレタスの屍をすてゝ退く。オートメドン其が物を剣取り少し鬱憤を晴しぬと誇り呼はふ。かくして又パトロクラスの屍のほとりに大激戦はじまりぬ。此の時ミテルゾの神雲に隠れて希臘陣に天降りけり。ディオウの意向一變したればなりけり。女神はアエニクスと化現してまづメテレアスを奮勵す。さてメテレ

アスの女神より勇力を授かるや務地にトロイの陣に突き入りヘクトルが最愛の従黨ポリアスを斬る。其の時アポロの神ヘクトルに向かひ「汝孱弱なるメテレアスを怖れば希臘人もまた汝を怖れざるに至るべきぞ。ポリアスの彼れに殺されつるを知らずや」といふ。ヘクトル奮激して進戦す。折から大神は楯をひらめかしてアイダ山嶺に黒雲を起すほどに電ひらめき雷おどろしく鳴りはためき山岳これが爲に震ひ動きぬ。ヘクトル大にたけりて縦横に薙立つれば希臘勢散々に破れアイドメニウスも槍を折られ剩へ其の御者をも討たれメリオネスと共に味方の軍艦へと退走す。

アッヤツクス希臘人を顧みて歎じていはく「ゾイヴの神トロイ人を助けさせ給へばこそ我黨の投ずる武器は悉く規を誤りて地に落ちけれ。あはれバトロクラスが屍を牽き歸らん勇士もがな。せめて彼れが陣没をアキリーズに傳へん由もがな。それだにもかく闇黒の裡につまられたれば望むべからざるか。あはれ天地の大王ゾイヴスの大神よ。我が所憐を納れて光明を與へ此の暗黒を拂はせて給へ。我黨の命の極みならば死をばなどて厭はん。只白日に死なしめよ」と。

大神こを聽きて哀を催し直に雲霧を掻拂へば日輪赫どかやいて甲冑の光彩燦爛し。爾時アッヤツクス勇みたちてメテレアスに向かひ「足下疾くオニストルの子アンチロカスを探し出だしてバトロクラスの計をアキリーズに傳へさせてよ」といふ。メテレアスはこゝを見捨て行かんを本意なしと思ひけれど止むを得ざりければバトロクラスの屍をアッヤツクスとメリオネスとに托し置きて急ぎ彼方の陣に兵を指揮しゐたりしアンチロカスの傍へ行き告ぐらく「神味方に厄を下しバトロクラスはや討たれき。足下急ぎ艦に到りてアキリーズに計を傳へよ」と。アンチロカス聞きて頓には物も得いはず只はらくと落涙しけるがやがて車に打乗りて軍艦へと馳せゆきけり。かくてメテレアスはスラシミデスをして此の一隊をつかさどらせさて再び引返してアッヤツクスの許に行きていふ「足下のいはれたるやうにしつ。されどアキリーズたどへヘクトルを怨み怒るども今は打て出でざるべし。其の鎧なければなり。此の上は如何にしてバトロクラスの屍を牽き去り又我黨の死運をのがるべきかを議せざるべからず」といふ。アッヤツク應へていふ「願はくは足下とメリオネスとバトロクラスの屍を牽去れ。我

等兄弟は隘止まりて敵を防がんと。かゝりしかば二勇士勇を鼓して其の友の屍を昇きあげんと志たりし時トロイ兵また大に喚き叫びて一齊に來襲す。アツヤツクスの兄弟奮闘して之れを逐ひ二人は辛うじて屍をば軍艦へ將てゆきぬ。

第十八卷

アキリーズは船首にたゞすみて深く物思に沈み希臘兵の敗走するを見て其の友の身に禍ありしを推測し悵然として獨語せる折しもアンチロカス宙を飛びて馳せ來たりバトロクラスが訃を報ず。アキリーズかくと聞きて悲憤すること心狂へる如く灰燼を双の手に摺みて其の頭にふりかけ髪を搔きむしり身をもだへそのまゝそこに平張倒れて我れかを辨へぬさまなりけり。侍女は驚き悲み胸を打ちて打泣きアンチロカスはた爲す所を知らず。さるほどにアキリーズが號泣の聲の海底にや通じけんそが母なるセチスはありとある河海の女神を呼び集へて英雄を生みたりしと中々にうらめしと歎き彼れがかく常住に愁ひ悲しむを我れ救はんに由なけれどさりとて徒に看過するに忍びず往きて故由を問はんとして海洞を走りいづ。女神等も哀れがりてそがあとを尾ひくほどにセチスはアキリー

ズのほとりにていたり打泣きつゝいふやうに汝などてかく哭くぞ。如何なる悲しき事かいで來しヨローツは汝が願言を納れたまひしにはあらぬか。アキリーズ答へてげに大神は我が願を納れたまへり。さはあれ我が命とも思ふバトロクラスを失ひ剩へいみじき鎧をさへ奪はれて今は何の樂かあるべき。ヘクトルを殺して我が友の讐を報いずば我れは生きて歸らじ。セチス涙に咽びていふ汝が宿命はヘクトルのに次げりぞぞ。汝の壽もはや長からじ。アキリーズ太息をつき「我れ運拙くて黨人の死を救ふこと叶はざりしゆゑに我れもまた死すべき也。あはれ彼れは萬里の異郷に來て鬼となりぬ。如何ばかり遺恨を贖して黄泉に赴むきけん。我れ深く親黨に忠ならざりしを悔ゆ。確執も今はさらばぞ。怒も怨も今はさらばぞ。我れ一たびはアカメムノンを怒れりしが今はそれも思ふに違なし。いでヘクトルを求めい出して我が友の怨を報いん。ヘルキリーズすら死をば免がれざりき。運は天に任せんのみ。母御よゆめ出陣をなといめたまひそ。セチスいふ味方の災厄を救はんは悪しからぬぞ鎧なきを如何にすべき。我れワルカンに乞うて一領の新鎧を得て來んほどに明日の朝開まで勿出でそ。やそれ

女神たちよ。御身等は疾く歸りて此の事を海底の老君に告げよ。我れはこれよ
 かオリムポスに登りてヴルカン許とづれん。
 かくてセチスが女神とアキリーズとに分かれてオリムポス山へどかけゆきける
 間に 場の争闘はいや激しくなりて希臘がたいよ、危うくあはやバトロクラス
 の骸は敵の者とならんとしける。其の時ツエノーは急ぎ天使アイリスをアキリ
 ーズの傍に天降らせて其の出陣をば促せどアキリーズ母の言葉を守りて鎧なけ
 ればとてうけがはねをアイリス更におしかへしてよし鎧無くて戦場には臨みか
 たくも陣頭にたちて大喝せばトロイの兵避易せざらんや。ツエノーの神汝を護
 らせたまへればといふ。アキリーズ竟にいなみかねて起ち上がれば其の強剛な
 る双肩のまはりにはミテルヴの神そが神聖なる楯をかゝげ其の頭邊には他の女
 神金雲をたなびかせ又靈火の光を發せしむ。已にしてアキリーズ陣頭にゆるさ
 いで黄銅鐘の如き聲を放ちて大に呼ばふこと三たびミテルヴ彼方にありて應ふ
 ること三たびトロイが万馬これが爲に驚き狂ひトロイが千兵これが爲に魂飛び
 膽落ち周章狼狽易數里名士勇將の討たるゝこと十二人に及びぬ。

こゝに於てトロイ軍全敗し希臘勢は竟にバトロクラスの屍を救ふことを得たり。
 かくて其の日も暮れければ双方共に一どまづ引退きてまばらく疲をぞ休めける。
 此の間にセチスはヴルカンの鍛冶場に赴きアキリーズの爲に新鎧を得まくす。
 ヴルカン其乞を納れて立どころにいみじき甲冑を作りぬ。就中楯の壯麗美麗な
 ること得もいふべからず。精巧善美の善美とはかゝる作をいふなるべし。さて
 もセチスは此の神聖なる武具を得て勇み喜ぶこと限なく雪白のオリムポスの山
 嶺よりさながら隼鷹の如くにかけおりてアキリーズが許へぞ赴きける。
 此の楯の形容は古今空絶の筆なり。こゝに略寫すべくもあらずせめてもボ
 ーアの翻譯につきて見るべし。近世英國にてフラクスマンといふ者其の形
 容を本として四枚の楯を製りしが一枚の價二千ギニア(凡我一万圓)なりき其
 の中一枚はソオルサ三世王の架棚に用ひられ他の三枚は某々貴顯の有とな
 りぬとぞ聞えし。

第十九卷

其のあくるあしたアキリーズが尙も其の友の屍をかきいだいて哀傷にくれたり

し折しもセチスはヴルカンの神鎧を擔へて降り來つ。それをアキリーズに示して「これはこれ人間の未だ被るとを得ざりし貴き物具ぞ」といふにアキリーズもマルミドンの勇士等も仰ぎ見て驚き歎じ兵士等は皆其の神々しさにおそれてまさかには得もながめであのみきすすさりぬ。アキリーズ大に勇みたちて「今こそ我れ出陣の準備をせめ。さりながら其の間に我が友の屍の腐爛すらんを如何にかせん」。セチス慰めて「我が見よ介意すな。我れに方あればパトロクラスが屍をば永久に腐らぬ者とせん。汝は疾く味方の兵士等と呼び集へて人民の牧者たるアガメムノンと和睦し片時も早く出陣の準備せよや」。かくいひ終はりてセチスはアキリーズの牀内へ最も慄悍なる勇氣を吹き込みさて後パトロクラスの鼻孔の中へ靈餌と靈酒とを注ぎ入れて長久に腐爛を防ぎけり。

かくてアキリーズは希臘の陣頭に諸勇士を會して其の憤怨を抛ちて出陣せんことを宣り告ぐればアガメムノンもこれに對して答辯し兩雄の確執たちどころに氷解しければアキリーズは直に打ちいでんといらだつを智將ユリシーズ利害をときて制すれどもきかず。「さらばせめて糧食をだに十分にたためさせて後に

せよ」とてやうくはやりにはやるアキリーズをとどめける。さて準備ごとくどしどしひければアキリーズは出陣せんとて其の馬ザンサスとペリウスとに向かひ「汝等も構へてよくせよ再び汝が主をしてパトロクラスの如くならしめなといふ。馬どもまばし頭をうなだれてありしがやがてユノ一の神が物言ふ力を授けしればザンサスはたちまち主を仰ぎ見ていふやう「我等力の及ばん程はなごて力めざらん。さりながらパトロクラスぬしの失せたまひぬるは宿命の所爲なれば何者かよくそを回らし得ん。悲しきかな我が君の身にもまた其の宿命は逼まりてあり」。アキリーズなかばも聞かず赫と怒り「あな無益やいはずもあれ。よし我れ此の一戦に死なんずともトロイ人をして戦亂に鑿かしめずば我れ争で退くべき。我れいかで休せん」。

かれは先陣に進みて大喝し其の健脚の駿馬をばまつしくらにぞ走らせける。

第二十卷

ジョーヴの神の召によりて諸の神、天宮に集ひける時、プテューノンの神は中央に立ちて大神の意向いかにと問ふ。ジョーヴ曰はく「今は汝等各々其の擇ぶまゝに

應援せよ。何れに味方すとも我れは關せじ。徐に此處にゐて打眺めてんと。か
 かりしかばツエノミチルヴ、チブチエノ、マルキエリ、ブルカン等の諸神は希
 臘の艦に赴きマーズ、フヒーバス、ダイアナ、ラトリーナ、ザンタス、ネーナス等の神々は
 トロイの陣に馳向かひぬ。かくてまたも激しき戦となりマーズの神は旋風の如
 くトロイの軍士を叱咤して指揮し、殷々たる雷すさまじく鳴轟きチブチエノの
 神はいらちて天地山川震動し坤軸これが爲めに裂けんとし黄泉神これが爲に慄
 ひ戦く。正に是れ神と神との敵對マーズにはミチルヴ、チブチエノにはアポロ
 ー、ツエノにはダイアナ、ラトリーナにはマルキエリ、ブルカンにはザンタス相對
 す。此の時に當たりアキリーズは只管ヘクトル一人を目がけつゝ突進す。アポ
 ローの神かくと見てエニヤスを呼び起こし、汝は天神ネーナスの子にあらずや。
 彼れアキリーズの母はいたく劣れる海の神なるに汝などて彼れを恐るゝと罵り
 勵まして逆へ撃たしむ。ツエノ一是を見て諸神に向かひ、あはれアキリーズを助
 け給へと呼ぶ。チブチエノのいはく、味方より挑むに及ばじ。彼等手出しせ
 ばやがて自ら破れて退かんと。相共にヘルキエリスの高嶺の上に登りて一帯の

不溶雲を懸かせたり。されば此方の神々も志ばし引さがりてカリコロン山の
 巔に坐し互に密議をぞ凝らしける。さても二英雄は兩軍の中央に進みて互に近
 寄れる時アキリーズ、先づ聲をかけ、今汝我れを討取りてトロイ人より恩賞を得ん
 と想ふは不覺の第一ぞ。我れ嘗て汝をアイダ山より逐ひ下し、時神力をかりて
 一命を拾ひしを忘れしかと呼ぶ。エニヤス應へて、我れを嬰兒と侮りて虚喝な
 せそ。そも我れは畏くもツエノの神の血脉なるを、と長々しく其が系圖を語り
 「いでや人間の言葉は繁し諍論には限あらじ。舌戦は無益、槍頭の勝負せんといひ
 もあへず突きかけつゝアキリーズが五重の楯を二重までぞ貫きける。其の時ア
 キリーズがいちちて投げし槍はエニヤスの楯をかすりて大地に深く突立ちけり。
 さればアキリーズは長劍を抜き打てかゝりエニヤスの巨石を捧げて禦ぐ。チ
 ブチエノの神諸神を顧みていはく、あはれ罪なくて奈落に沈まんとするエニヤ
 スを拯ひたまへ。大神の苗裔をば絶たしむべからずと。ツエノの神いふ、我れ
 どミチルヴとは誰彼の別なくトロイ人を容赦せじと誓ひつ。御身助けまくほり
 せばみづからせよといふ。チブチエノ急ぎあなたに驅せ行きまづアキリーズ

の兩眼を眩ましてエニヤスを救ひさてトロイ陣に連れ行き汝何たるぞ。彼れは汝に勝れるを。ゆめ彼にな近きと誠めさてアキリーズの兩眼より暗霧を拂ひければアキリーズ大に異しみあらいぶかし。今見し敵は影をといめず。さては大神の擁護し給ふにやあらん。いで他のトロイ人を試みてんと更に味方を鼓舞して奮進す。ヘクトルもまた以爲へらくアキリーズたとへ猛火金鐵の如しども我れ豈進まざらんやと。大にトロイ勢を勵まして戦ふ。アポロの神ヘクトルを戒めていはくかまへてアキリーズと一騎打の勝負すなど。さる程にアキリーズは夥多トロイの名士勇將を討取り竟にヘクトルにいであひて戦を挑む。ヘクトルは我れよし汝に劣れりとも神助あるぞといひつゝ長槍を投附けしるをミテルグ中間にて其の鋒をといめて刎返しぬる時アキリーズつとヘクトルを突きけるがアポロ忽ち狹霧を下してヘクトルが身をつゝみければ三たび突きて三たび空しく霧をうちぬ。アキリーズ大にいらち猛り狂ひて八方に薙さまはり立どころにトロイ兵あまた斬殺しぬ。すさじきこといはんかたなし。

第二十一卷

アキリーズ、トロイ勢を追うて一隊をば平原より市府に向かうて走らせ又一隊をばザンタス河に陥入らせければ滔々と漲る河流に溺れて喚き叫ぶ聲兩岸にとほろきけり。さて彼れは劍を掲げて其の中に跳り入りて當たるにまかせて斬倒しければ流水忽ちに紅と變じ小魚の鯨鯢に逐はれたらんやうにトロイ人は河畔の洞窟に身を匿しける。アキリーズは其の中の十二人を生擒りパトロクラスの死靈を祭るの犠牲としなほ進みけるうち巖に擲にして放ちやりシライアムの子リカオン出遭ひぬ。リカオンは其の膝下に跪きて只管助命を乞ひ以前よりも三倍の償品を呈すべしと訴へけれどアキリーズは聴かず以前はともかくもパトロクラスの殺されし上はトロイ人中にもプライアムの子は一人とても赦し難し。我れとても宿命をばえ道るまじと思へるをや。覺悟せよといひさま只一擊に斬倒して骸を河中に投込み誇りていはく汝此のスカマンデル河の波にたゞよひてやがて大海の魚の腹に葬られなん。我等のイリアムをほろぼし果つるまでは汝等たどへ數多の肥牛と駿馬とをさしげて此の大河の神に禱るとも甲斐あらじといふ。河伯聽いていたく怒り如何にもしてアキリーズを避易せせんと思ひ定

めけり。恰もよしアキリス河伯の子アキリーズに向かひ來たる。ザンタスの神彼れに勇力を授けて進撃せしむ。されど其の甲斐もなく却りてアキリーズのために討たれけり。アキリーズ其が物具を剥ぎとりて大河の族などて大神の苗裔に及ぶべきぞとのしりやがて又フェニシアの騎兵の方へ進み立どころに敵七人をぞ斬りける。ザンタス耐へかねて水底より聲を發していはくアキリーズ汝神力を憑みて無益の業をするかな。トロイ人を塵にせんと思はば平原にてせよ。我が水流屍の爲にせかれれば大海に入ること能はじ。止まれよと。アキリーズ答へて「トロイ人を市府に逐籠めヘクトルと雌雄を決せんまではいかで止まるべき」と又も中央に突進む。此の時ザンタスの水かさ忽然と増し怒濤を捲き無數の死骸を兩岸にうちあげアキリーズの騎せる楯を目がけて寄せ來る。アキリーズも流石に陥止まり難くぞ見えける。さればアキリーズは岸の大樹を引ぬきて其の枝葉もて激流を防ぎ幹もて橋梁とす。ザンタスはなほ黒潮を揚げて迫り來る。アキリーズ飛鳥の如く飛び超えて斜に避ければ水は其の背後より押寄せて彼れが肩をひたし且其が脚下の砂をたよはせければアキリーズ天を仰ぎて

號泣し「あはれツヨグの神よ。たゞ此の水難を拯ひ給へさて後は如何なる艱苦をも忍ばん。かゝる耻づべき死をせんよりはヘクトル來たりて我を殺せ」と禱りける。チプチユーンとミテルワと馳せ來たり我等は太神の命をうけ汝の救援に降りぬるぞ。心安くせよといふ。アキリーズまた勇氣を復し平原にうちいでんとするに向かひは一面の大海となりて屍おびたしく浮び漂ふ。アキリーズこれにもひるまで突進す。ザンタスもまた退かで其の弟シモイ河を呼び汝源泉より洪水を起こし來て無數の小川を漲らせ此の狂夫を制へよ。彼奴をば海底に沈めて軟泥の中に葬りてんといふ。見る／＼紫水湧きかへりてアキリーズを襲ふ。ツユノ一神かくと見てブルカンの神を呼び「足下大火焰を起してアキリーズを助けよ我れは暴風を起こしてそを煽がん。疾う／＼兩岸の樹木を燒盡くしね」と命ず。是に於てブルカンの神焔を河心に向けて吹込みければ遊魚もどろきはね狂浪沸きかへりぬ。ザンタス大に避易しツユノ一に向かひて我れに悪意なし。あはれ此の猛焔を鎮めよといふ。ツユノ一すなはちブルカンに「止めよ」と命ず。さる程に神々の間に激しき戦闘起れり。吶喊の聲天地を撼かす。ツヨグの神

はオリムポス山に在りて衝突して打眺めたりけり。マーズはミテルグに敵對し「汝嘗てダイオミードを煽動して我れに痛手を負はせしを記するか。今其の報せんと長槍もて彼れが巨楯を突く。然るにミテルグ磐石を投げてマーズの頸をうちければマーズは大地に倒れけり。ギナスいそぎマーズの手を把りて誘ひ去りぬ。シュノーすなはちミテルグをしてギナスを追はしむ。

ミテルグは難なくギナスを大地に搦ち倒しつ。やがて嘲りていはく「希臘に逆はんものはなべて此の如けん」と。此の時チプチエーンはアポロに打向かひ「御身年齢少ければ先づ敵を撃ち始めよ。さりながら御身は忘れたるか」とせ我等此のイリアムなる唐王の下のさまぐの辛慘を嘗めて苦役に服し我れはトロイ人のために莊麗の都府壘壁を築き御身はアイダの草深き杜に終日肥牛をやしなひしことを。其の時彼れは其の勞に酬いざるのみか我等を恐嚇し剩へ手足に械して遠き島に逐ひしならずや。而も御身はなほ彼等をば悦ばせんとほりするか」といふ。アポロ之れに應へて「げに榮枯常なき人間のために御身に刃向はんは深慮の所爲にあらず」と斯くいひてふりかへらんとするを其の妹ダイアナ突戻し

敵を恐れて逃ぐるとは卑怯なり。其の弓は何の用ぞと罵る。シュノー聞きて赫と怒り向かひを見ざる痴者かな。我にさからはんよりは猛獸麋鹿などを搦たんとそ汝の身には似合はしけれ」と左手もて其の兩腕を掴み右手もて其の弓をもぎ取り耳のあたりをまたゝかにうちければ身をもだへしつゝ泣く／＼逃げゆきけり。マルキユリー、ラトリーナに謂へらく「我等は鬪はざるべし所詮シュノーには敵し難ければと引別かる。かくてラトリーナが落ちたる弓矢を拾ひて其の女ダイアナの後を尾しゆくうちにダイアナは天に馳登りて父太神の膝下に打伏して哀訴す。さるほどに諸の神皆オリムポスの山嶺なる太神の許に歸り集ひ怒るもあり誇るもあり罵るものありけり。そが中に獨りアポロの神のみは立別かれてイリアムの城に入りけり。かゝる時しもアキリーズはトロイの人馬を縦横に薙倒し打殺して逼まり來。プラリアムは此の跡を見て高塔より馳降りて番兵を呼び起し急ぎ城門を開放して逃入る味方の士を救はしむ。アキリーズはたけり狂ひ奮撃突進してあはや城壁を乗除えんとす。爾時アンテノールの子アゲノールもどりいでゝ高らかに呼ばはりて戦を挑み互にまばし打合ひしがアポロの神霧を

下してアゲノールを打覆ひ且やがてみづからアゲノールに化して逃げゆく。アキリーズ志きりに其の後を追ふ。其の間にトロイ人は悉く城内に逃入り門の扉をどさしけり。

第二十二卷

希臘勢はいよ／＼鮮々と押寄せける。此の時ヘクトルはなほスキヤン門頭に駐りしが是れぞ天運の窮極とは知られし。さてもアポロは追ひ来るアキリーズをはたと睨みて宣らく「汝は我が天つ神なるを職らざるか」と。アキリーズ大に怒り「さては汝我れを欺き此の處まで誘ひしな。遺恨おもひしれ」といひさま關門さして馳せ行く。老王プライアムかくと見て雙手を舉げて門頭に立てるヘクトルを呼び「汝單騎にして彼れにな向かひそ。然せんは不覺の至なるべきぞ。無慘なりや神アキリーズをいつくしみ給はずば此の悲しみはなからんを。我が子兩人已に其の生死も定かならぬに今また汝を失はば國人何によりてか其の心を慰めん。疾う／＼城内に逃籠もりて汝が命を全うせよ。老いてかゝるあさましき見んことこのうれはしきよ。壯者には戦場の死も花々しからめこの白頭を狗禽の餌

にせんことこの耻かしや。我が心思ひやりてよヘクトルと播口説く。母も共に胸をあさへて「ヘクトルよ。汝情を知らば父御の言に従ひて此處に来て敵を禦げ。勇にはやりて母と妻とに憂目をな見せそ」と打泣く。されどもヘクトルは打聽かでアキリーズの来るを待ちかけたなり。彼れ其の心に問へらく「我れいま門内に入らばまづポリダマス我れを嘲らん。さりとして入らずして破滅を招かばヘクトル勇を恐みてトロイの蒼生を亡ぼしぬとやいはんずらん。さらばむしろ我が槍を投げ我が楯を棄て、彼れが面前に跪かんかヘレンとトロイの財寶の半とを願かたんの誓を爲さる可からず。嗚呼何事ぞや。我れ何事をか思案したる。彼れアキリーズいかで我れに仁情あらんやいかで我れと親しまんや。如かず神慮のまに／＼雌雄を決せんにはと。時しもあれアキリーズはあそろしき大槍を右肩の上のうちふり甲冑の金光を爛然とかいやかしてはやヘクトルが側に立ちけり。ヘクトル思はず身顛してそらに關門を後にして逃去るをアキリーズ急に追ふ。隼鷹の遅鳩を捕たんとて追ふが如くなりけり。かくて追ふ者も追はるゝ者も共に劣らむと疾走して三たびまでプライアムの市をめぐりぬ。爾後ツョーヅの神

は諸神に向かひ、今やヘクトルを助くべきか、はた殺さしむべきかと問ふ。ミネル
 ヴの神のいはく、彼れの運命はすでに盡きたり。今のはや助け給ふべきにあらず
 と。大神すなはちミネルヴのいふが儘になさしむ。かゝりしかば女神はオリム
 ポス山より降り來たる。此の時アキリーズはなほもヘクトルを追ふこと急なり。
 ヘクトルは幾たびも轉びながら若しや來たり救ふものあらんかとダルダニヤ門
 をさして走りけり。されば若しアポロの神が護らざば命も危しと見えけり。
 折しもアポロの神が二者の死運を黄金の秤に盛りて量りけるにヘクトルの方
 傾きければアポロの神すなはちやむことを得て彼れが傍を離れけり。其の時
 ミネルヴの神はアキリーズに近づきていふやう、今やヘクトルが命は竭きたり。
 我れ汝と彼れとを相會せしめん。やがてディオオバスの姿に化現し、逃れゆく
 ヘクトルに追ひすがりていでや我々兄弟相共に敵に向かはしやと思ふがいかに
 とそのかせばヘクトルあざむかれて大に喜び汝よく來たりけるよ。あはれ
 殊勝なりとほめたふ。僞ディオオバスの曰はく、父母の切なる願言（ワガヒコト）によりて參
 りぬ。いざ、諸共にアキリーズと雌雄を決すべしと。ヘクトルすなはち大音

に呼ばゝりていはく、いかにアキリーズ我れ三たびまでトロイ城外を廻りしが今
 はもはや逃げも隠れもせじ。いで、ふりかへりて尋常の勝負せん。天津神々
 も照覽あれ汝若し我が槍鋒にかゝりて果てなば我れ其の鎧を剥ぎとりて後汝が
 屍をクリース方へ送り還さん。汝もまた志かせよと。アキリーズ應ふらく、誓言
 は無益ぞ。汝と我れとはなほ羊と狼との如し。いかで相和する時のあるべき。
 無要の舌の根を動かさずともたゞ汝が勇氣を起こしぬ。我れいまミネルヴ神の
 冥助によりて日頃の遺恨を晴らさん。覺悟せよと呼ばひつゝ、長き槍をうちふ
 りて繰り出だす。ヘクトルすかさず其の躰をかゝめければ其の鋒は誤りて地上
 に突立ちぬ。其のときミネルヴ走りよりて其の槍をつと抜き取りて急ぎアキリ
 ーズにわたしけるをヘクトルはちとも知らざりけり。されば彼れ大に誇りてい
 はく、あはれ汝懲れり。我が運命を得も知らずで奇怪なる言葉を吐き我が勇氣を奪
 はまくするか。汝多辯の志れもの。見よ汝の槍は我が背を打超えていたづらに
 大地を貫きたるにあらずや。神慮の程知るべき也。いでさらば我が利き鋒尖を
 受けて見よといひさき長き投槍を一振ふりてアキリーズを目がけて繰り出だし

しが規はそれて槍は空しく餘處に飛びぬ。ヘクトル大に焦燥ちけれども第二の槍なかりければ急ぎアイフォバスを呼ぶに應答なし。ヘクトル大に愕き、嗚呼さては天津神々我れを殺さんとして此處へは招き給へるか。アイフォバスは在らずミナルブは我れを欺きぬ。運命もはや遁るゝところなし。さはれ汚き未練なる死をばやは遂ぐべき。いで／＼花々しき最後の働して美名を後昆に遺すべしと。乃ち大劍を抜き放つ。アキリーズ逆へて打合ひ少時は互角に挑みけるがヘクトルが着たる鎧の隙間より頸骨の少しばかり露れたりしをアキリーズあめいて槍をもて貫きければヘクトルこらへかねて倒れけり。アキリーズ誇りて曰く「汝バトロクラスを殺しながら其身安泰ならんと思へりしこそ不覺なれ。今こそ希臘人が汝を狗禽の餌となさん時來たりたれ」と。ヘクトルはたえ／＼なる息の下より我が父母は夥多の金銀もて我が身を償ふべし。あはれ此の屍をば彼方に送還して彼等をして葬儀に與らしめてよといふ。アキリーズ聽かず「我れ汝の肉をなますにせずばやまじと思へり。汝の父が幾何の償金も汝の母が哀願も無益なるはといふ。ヘクトル怒りて「汝は無情の鐵石かな。よし／＼今に見よ汝もまたス

クアン門のほとりにてアポロの神並にパリスの手にかゝりて果敢なく果つべき時來たらんといふ。アキリーズいふよし我れはた天運の所爲に一任せんのみ。汝もまた疾く往生せよと。乃ち其の槍を引抜きて血汐に塗れたる鎧を剝ぐ。かゝりければ希臘人各々争うてヘクトルが死骸を取捲き只管姿容のいみじく妙なるを讚歎す。アキリーズ彼等に向かひていへらく「希臘の將校各位よ。我れ今神々の允可を得て我黨に幾多の災害を蒙らせし敵の英雄を取討り了んぬ。さて是れよりは改めて敵の舉動を視察すべし。さりながらバトロクラスはなほ死骸のままに艦の内に横はりてあり。壯士よいざさらば吊歌をうたうて諸共に凱旋し彼れが屍を埋葬せん」と。やがてヘクトルの踵より足の面へ革の帯を穿ちさて戦車に結び附けかくして砂煙のうちを倒にして曳行きけり。無慚なりしとどもなり。これを打見たる滿城の士女は泣き叫び父王は悲嘆のあまり關門より轉び出でんとしてトロイ人を顧み我れこの無情殘忍の敵に哀願せばや。彼れには我が如き父の在れば彼等も或は我れを敬ひ我が老年をやあはれまん。あはれヘクトルが若し我が膝下にてみまからばかゝる悲歎はなかるべかりしを」と。母后も

正躰なく大音あげてぞ泣きける。妻のアンドロマキイはかゝるとどはいさゝか
も知らで別殿にて綾衣を織りて居たりけるが高閣より號泣の聲頻に聞こえけれ
ば手も足もわなゝき忽ち梭を投げやり二人の侍女を呼びていふ「汝等われにつき
て來よ。姑君のかく嘆き給ふは訝し。我が胸そいろにもうち騒ぐ。何事か凶事
の起こりしならん。もしやアキリーズが我が夫の歸路を絶ちて城外にて逐ひ迫
り困しむるにはあらぬか。あな心元なの限や」と氣も半亂となりて駈け出でつゝ
高き塔に攀ぢ登りて遙なる彼方を瞰下せばわはれヘクトル淺ましき屍となりて
曳きづられゆくなりけり。此の有様を見るほどに眼も眩みつゝ心も消えつゝと
なりてたちまち其處に臥倒れ妙なる髪は掻亂れ珠の鬘は碎けて飛びけり。漸く
に息を吹返し打なきて「我が夫はトロイに我が身はシープスに生れたりき。故里
はかかれども運命は同じかりけり。果敢なき夫婦の縁かな。御身は此の妻と此
の稚兒とをふりすて、黄泉國に逝き給ふ。残されたるこの寡婦の身をいかにせ
まし。一しほ哀れなるは二人が間の此の孩兒ぞや。男親の恩愛をもえ知らぬば
其を報ゆるも及ばぬぞうたてき。よし戦場の災禍をば遁るとも行末の辛苦いか

ならん。父おはさねば世の人に侮られ辱しめられ斥けられて其が莊園をも奪は
れなん。果は他人の袂に縋りて辛うじて其が唇を濕すなるべし。然るにさりと
も知らで暖き床の中に今心安げに睡る此兒のいぢらしさよ。さてはまた此の日
ごろ心を籠めて織りいでしかの綾の裳も何かせん。悲しきかなといひつゝふし
轉び泣きければ侍女もなぐさめ給はてげに道理といひつゝ共音にぞ打泣くめる。

第二十三卷

さるほどにアキリーズはミルミドンの勇士等を集めていふやう「亡人の譽なれば
我々一同はパトロクラスを追悼し志かして後に晩餐をば物すべし」と。やがて彼
れが死骸を取圍みて一同聲をそろへて慟哭す。雨の如く落つる涙は濱の眞砂を
濡しけり。中にもアキリーズは死骸をかき抱きて「やよパトロクラス。黄泉の國
に在りとも喜べよ。爰にヘクトルを曳來たり又トロイの名士十二人を斬るべき
にぞ慰めさて吊宴を開きけり。かくて諸將はかはるゝアキリーズをなぐさめ
てアガメムノン許誘ひゆきまづ其の汚れをそゝがしめんとす。アキリーズ聽か
ずしていふ「パトロクラスを火葬し墳墓を築き我が頭髮を断つまでは一滴の水に

だに濡れじと。さてまたアガムノンに向かひていふ「君願はくは朝とならばあまたの薪木を運ばせ此の屍を烟となし我がために盡きぬ愁を拂へよ」と。かくてアキリーズは荒浪のだら／＼と寄する濱邊を行吟しけるが身も心も勞れて睡を催しければ覺えず其處に打臥しける時夢にパトロクラスの亡靈髣髴と枕邊に現はれ「あはれアキリーズよ。君生前は我れを忽ゆるがせに志たまはざりしに今は我れを忘れたまへるか。他界の魔鬼我れを妨げて三途の河を渡さず我れは尙黄泉の國の境にさまよへり。あはれ我が骸を葬りて疾く奈落の門を過ぎらしめてよ。我れ再びは娑婆に還る能はざれば乞ふらくは君が手を與へよ。悲しや君もまたトロイ城下に果て給はんがその時は我が骨を君のと同じ處に埋め給ひてよ。さるは我れは君の家に養はれし君の滄はらぬ從者なればといふ。アキリーズ答へて「足下の命ずる儘に何事をも成すべし。さらば相抱きて少時しばし名残を惜しまん」と双手をさし伸べけるに影は消えてなかりけり。アキリーズ愕然と醒めて「さては魂のみありて正体はなきか」と又も泣き悲しみける。そのうちに夜も明ければアガムノンはメリオテスに命じてアイダ山の森より大木を切取りてパトロクラ

スが墓地と定めたる濱邊にぞ積み上げける。ミルミドンの人々列を揃へて其が中央にはパトロクラスの屍を載せ騎兵歩卒前後を圍繞し毛髪もてパトロクラスが軀を覆ひさてアキリーズは其の後に從ひて其が頭を捧げ行きぬ。かくて墓地に達しける時アキリーズたちにおのが黄髪を切斷し黒海を打眺めていへらく「我が父嘗て此の河の神に我れ本國に歸らん時此の頭髮を犠牲にせんと誓ひき。然るに河伯父の意志を果たさしめず故に我れこれをパトロクラスに與へん」と。すなはち彼れが手に握らしむ。是に於て人々は薪木を積みて高さ百尺の堆たいをきつき其が頂上に屍を載せ肥羊牡牛の臍肉を取りて其が上を掩ひ棺車に倚せて蜂蜜香油を盛りたる器を置き四頭の駿馬と二頭の狗とを其の中に投じ十二人のトロイ勇士を屠りて火をかけしむ。折しもアポロの神黒雲を起こして日光を遮りければ火はえばらく燃えざりけり。アキリーズすなはち風の神を禱る。大風たちどころに起こり焔々天をこがし天明に至りて物悉く焼盡す。やがて其の遺骨を黄金の匣におさめさて其處に一基の墳墓をぞ築きける。

人大鼎一個、第二胎める駿駒一頭、第三新しく美しき小鼎一個、第四黄金二タール、
トの四點を懸けていはく、各々競馬の優劣によりて此等の賞品を得ん。我が天馬
は比倫なけれども今は其の御者を失ひ惜々と立てり。此の言を聞くや五人の
勇將ユーメラス王、ダイオミード、メテレアス、アンチロカス、メリオネス相續ぎて立
揚り、此の時老将ネストール其の子アンチロカスを誑め、詳に駕御の法を教ふ、各々戰
車に乗り圍をもて順を定む。アキリーズは標木をさし示し、アエニックスは判者
たり。かくて一齊に鞭を揚げ砂烟を蹴立て、平原に駈出づ。馬具風に靡きて翻
々たり。各々車上に立ちて秘術を盡くす。漸くにして勝負分かる。ユーメラス
王第一とぞ見えたる。されどダイオミードつゞき進みければ、アポロの神其の
鞭をもぎ取らずば、先後わきがたくぞ見えし。其時ミネルヴの神其の鞭をふるひ
ければ、ユーメラス王は其の馬の衝木を折られ、車より抛げ落されき。其の間にダ
イオミードは一鞭あて、乗除えメネレアスこれにつゞきて駈けさせたり。次に
アンチロカス其の馬を勵ましよし、ダイオミードに及ばずともメネレアスには後
れじと追ふ。メネレアス車の軋轆を避けんと窪みたる狭き路に乗入る。アンチ

ロカスなほ其方に向かひて進む。メネラウスの止むるをも聽かで駈けさせける
程にメネレアスの馬倒れ車覆りぬ。されど再び鞭撻ちて馳せさす。此の光景を
見たりしアイドメニウスはいふ、ユーメラスは倒れつ。あれ見よ、ダイオミードこ
そ第一の着到ならめ。アジャックス怒りて、駈れ多言者よ。勝者は必やユーメ
ラス王なるを、罵りあはや珍事ともならんとす。アキリーズすなはち之れを制
止す。爾時ダイオミード馬場の中央に駈け來ると見えけるが、直に車より飛下り
第一の賞品を受く。アンチロカスは第二着なり。第三はメネレアス、第四はメリ
オネス、最後はユーメラスなりけり。アキリーズ彼れをあはれみて、第二の賞品を
與ふ。アンチロカス之れを難じ、足下彼れを憐まば宜しく、足下の財寶を與ふべし。
我が賞品を奪ふなかれといふ。アキリーズ其の言に従ひ胸甲一領を與ふ。メテ
レアスはアンチロカスを譴めていふ、汝驚馬をもて詐術を行ひ我が駿足を辱しめ
き。以後此の如きとなきを我が車馬の前にて誓へ。チンチロカス叩謝し、足下
我が少年血氣の罪を免さば、第二の賞品のみならず如何なる物にても足下の望に
任さんといふ。メテレアスすなはち將來を誑め、第二の賞品を與へ、自らは第三の

賞品を受く。さてメリオオスは第四の賞品を得第五をばチストルの物としけり。チストル大に悦び壯時に競車、角艇、競走、鎗術等をもて功名なしとこどもを賤り今更に壯者に件の遊戯をば爲さしめよと勸む。是に於てアキリーズは一頭の駒を曳來たり、拳闘にては誰れか吾が右に出づべき。我れと思はんものは出でよ。胸骨を挫きてんと誇る。人々志ばし黙然たりしがユーリヤラスといふもの之れに應じて馬場の中央に出で螺の如き拳をふりあげて闘ふ。遂に前者の勝利となりぬ。次に角艇に勝ちたる者には大鼎を負けたるには美女を與へんといふ。アジャツクスとユーリシス立上りて互に組みあひ汗を絞りゑいゝと揉合ひしが勝負決せざりしかばアキリーズこれを引分けし。第四の競走にはユーリシスと小アジャツクスと相競ひしがミネルヴの神の助にてユーリシス銀杯を得たりけり。次は槍術の闘争にしてダイオミード、大アジャツクスの兩士志ばらく突合ひけるがダイオミード勝ちければアキリーズ賞品として銀作の劍をダイオミードに與へけり。次にポリポエテスといふ者牧者の鞭をなぐる如く大鐵丸を抛げて喝采を博す。次に弓術の競争にチニールはアポロの神の嫉によりて第

二の賞品をメリオオスは第一を得たり。最後に長槍と大釜とを賞としけるがアガムノンとメリオオスとの競技なりき。アキリーズ、アガムノンをして其の槍をメリオオスに與へしむ。かくて演戯は全く終はりけり。

第二十四卷

あのかちりゝに分かれて軍艦に飯りやがて晩餐をも了へて眠に就きけるがひとりアキリーズのみはさすがにみまがりしバトロクラスがことを忘れかねたり。彼れと共に成し、功績共に分かちし艱苦などとりゝ憶ひ出だされて夜もすがら目も合はず其が屍のほりに身もだへして泣き明かしける。あくればアキリーズは疾く起きいで、無慙にも戦車の尾にヘクトルの屍をつなぎバトロクラスが墓の周圍を幾たびとなく率廻りぬ。アポロの神此の様を見てあはれがりひそかにヘクトルが身より塵垢をはらひ去り且黄金の楯をもて打覆ひつゝ衛りぬ。他の諸神もそいろに哀を催ふしマルキユリーの神をして竊になきがらを奪はせまくす。アポロの神のいはく、みこと達は曾て絶えず供御を怠らざりし勇士ヘクトルが斯る無慙なる目にあへるをあはれどもみたまはで却りて殘忍傲

慢なるアキリーズをめぐみたまへるは何事ぞ。思ふに親子同胞の讐にてもあることかゝのが親黨只ひとりのために斯る殘暴の所爲をするは到底アキリーズが身の爲ならじ。急ぎ彼れが手を引離さんと思ふはいかにぞ。ツエノ一神是を聽きていふ「ヘクトルとアキリーズとを同等に見るはいかにぞや。一は人間の胎内にやどり他は我が手にて養育みし女神の子なるを」と諍ふ。ツエノ一の神之れを制して「ヘクトルはあらゆる人間の中にて諸神の最も寵しむところ。我れとてもまた然り。さはあれど今アキリーズが目を竊みて彼れを奪はんはいと難し。むしろ彼が母セチスを招いてアキリーズを諭さしめプライアムの償品を納れて疾くヘクトルの屍を還せといはしめん」といふ。かゝりければ天使アイリスは勅をうけたまはりて八重の潮路を分けてセチスが洞窟に臻りさて云々と太神の命を傳ふ。セチスは心中に無量の悲愁あれば諸神の前に出でんことも面伏なりけれど神勅の黙止し難ければとて本意ならずも天闕に登り來。其の時ツエノ一の神宣すらく「いましを此處に招きつるは彼のヘクトルが屍の事につきて神々の間に異論起こり其の争喧しく爲に徒に九日をば過さしつ。或は強ひて奪去らばやと

もいふ。かるが故に我れヘクトルの名譽を思ひ且はいましが敬愛を思ひむしろ汝に命じてアキリーズを諭させんとて招きつ。急ぎアキリーズの許にまゐりて告げ知らせてよ。彼れがヘクトルの屍を艦にとりめたるがため諸神なかんづく我が怒一方ならず速く屍を返附すべしと。我れはまたアイリスをプライアム許遣はしアキリーズが心を和ぐべき相當の償品を贈らせんと。かゝりければセチスはオリムポス山を降りてアキリーズが許にゆきさて云々と告げていと懇に諭しければアキリーズも忝少しく解けツエノ一太神の嚴命とあらば是非もなし。志からばプライアムが償品を受けてヘクトルが屍をば返附すべしと諾しぬ。さてまた天使アイリスは太神の命を奉じてプライアムが殿中にゆきて見るに折しも數多の子女老王が前後を取圍みて號泣しをり。プライアムも大地に伏轉びて哭きあたり。アイリス聲低く宣らく「いかにプライアム。心安くせよ。太神御身を憐み給ひて我れを遣はしたまふ。且御身に勅したまはく汝アキリーズが心にかなふべき贈品をもてヘクトルが屍を償へ。たゞ一人の老いたる從者をゐて行け。ゆめ怖るゝな。マルキュリーの神汝が嚮導たるべしと。是れ太神の勅な

り。ゆめ／＼疑ふなど。已にしてアイリス去る。プライアムすなはち其の子等に車馬の用意を命じさて親ら寶庫にゆき且其の後へクバにいへらく今しも天使降りて貨をもてヘクトルが屍を償はしむ。我が心いたく動けり。御身はいかに思ふぞと問ふ。后泣きながら卒爾なることなま給ひそ。只ひとりにて敵艦にもむき給はんとは何事ぞ。君が情は鐵か。彼の殘忍非道なる敵の男いかで君を憐まん。よしなきがらは此處になしども我々夫婦はこゝにみて不運なりし我が子を哀悼せん。たゞへ我が子の骸は狗の餌とならんとも彼れは天晴れ國の爲に潔き死を遂げたるをや云々。プライアムはあしかへしさりながら天使の言をして若しなみ／＼の卜者若しくは僧官等の口より出でしものならしめば違背せんもわろからねど長くもツヨク大神の勅なり。我れ行かざるべしや。たゞへ我が運の拙くて命は彼處に終はらんとも一たび我が子の屍を掻き抱くを得ばこれ無上なるよろこびなり云々。かくてプライアムは急ぎ寶匣の中より夥多の美しき衣裳、黄金并びに其の他の珍品奇什を取出だしさながら心狂ひたらんやうに左右の従士等を罵り叱りてそを戦車に積入れしむ。さるほどに后へクバは黄金

の杯を持來たりて老王に向かひいでやまづツヨク神に神酒を捧げて身の安全を騰りかつ君が嚮導者とならん神禽を乞ひ下したまへとすしむ。プライアムすなはち神酒を灑ぎて騰れば果せるかな一羽の隼鷹トロイ城の右手をめぐりて飛行きけり。プライアム大に悦び急に鞭をあげて駈け出づれば市民泣き悲みて見送る。爾時マルキユリーの神は太神の命を承けて脚には金剛鞋を穿ち手には睡醒自在の靈杖を携へて霧地にプライアムの方に向かひて馳せ來たり且いふそもそも足下は此の深夜に何處へか行かんとする。此の如き財寶を積載せながら敵の間近きをも怖れたまはぬか。見れば主従共に老躰ならずや。いと危しいと危しく。いでさらばそれがし足下たちの擁護者たらんと。プライアム應へていふ思ふに君は或神より送らせ給へる嚮導者ならんと。マルキユリーいつはりていふいかにも某は人間なれど足下を擁護せんと思ふものなり。さりながら足下は何故に此の夥多の財寶を輸出するか。英雄ヘクトルが死せしゆゑ落去せんとてか。それがし實はアキリーズの従士なりと。プライアムいふさらば足下は吾子を譏り給ふかいかに。彼れが屍は今なほ艦中にありやはた狗の餌食となりし

や。「いはく、ヘクトルの屍はなほ艦中にあり。已に十二日を経たれども容色は毫も損せず。支肢五躰いづこも腐らざ壞れず。まことに不思議なり。神の愛しみを給ふこと此の如し」と。プライアム大に悦びて之れに黄金の酒杯を贈る。マルキユリー之れを辭し只其の嚮導者たらんといひつゝ自ら手綱を探り鞭をふりて車を駈けさす。

かくて軍艦の入口に臻れば天使は番兵を悉く眠らしめ扉を開きてプライアムを導き更に進みてアキリーズの帷幕に入りさてプライアムに向かひ「我れ實はマルキユリーの神なり。父太神の勅を奉じて降り來しなり。汝は是れよりアキリーズにあひ彼れが父母のことを語りいで、其の心を動かすべし。はや我れは立皈らんといひて去る。プライアム内に入りて見ればアキリーズは二人の従士を隨へて坐したり。すなはち進み寄りて其が膝を擁し其が手に接吻す。アキリーズ愕然たり。プライアム愬へけらく「アキリーズよ。足下は我れと同じく多く老の坂を越えたる足下が父を憶はざるか。世は頼み少く倚るべき蔭もなし。彼れはたゞ朝に夕に足下の恙なきをのみ喜びつゝ其の歸郷の日を待てるならん。我れ

もまた數多の勇武なる子ありしが悲しや今は一人をだに殘さずなりぬ。就中我が最愛のヘクトルは足下の手にかゝりて果敢なき最後を遂げにき。さりながら今は歎くも詮なきゆゑせめても彼れが屍の得まほしくかくは償品をもたらし來たりぬ。あはれ足下あのが老父の上を憶はば現在我が愛兒の讐敵たる人の手に接吻する此の不幸の翁を憫み唯一の願を聽きぬ云々。アキリーズつくづく「打きて突と老王を搔遣りしが猛き心も溶くるやうになりて忽ちそこに伏し轉びて慟哭す。深く此の老王を憫み且はパトロク拉斯が上をも憶ひいでてまばしは悲嘆にくれぬたり。やがて徐に老王を扶け起こしていふやう「あはれ不幸の王や。御身如何なればかく單身にて仇敵の艦中には忍び來まし。さるにても定業は如何とも志がたし。濫にな歎きたまひそ。抑もヤソヨイザの寶前には福と禍との二匪あり。神は或人に一を與へ或人に他を與へたまふ。不幸にして禍を得たらんは終生逆境に迷ふとかや。我がペリウスの家も初めこそは福を受けたりしが遂にはかゝる不幸の子を授かりぬ。すなはち我れはかやうに異土の客となりて老父に孝養を盡くす能はず却りて他の父子の禍害となんぬ。さてまた御身の

一門もその如し。一たびは富み且榮えられたりしが今はかく零落して悲しき修羅の苦界にさまよふ。此れもまた定業なるべし云々。プライアムいふ我れは到底我が子ヘクトルの屍を見ざるべからず。あはれ此の償品を納れて疾く彼れが屍を返し給へ。アキリーズが忿怒この時にいたりてはやうやく全く解けんと志たり。すなはちいはくよしさらば此の贈品をもて彼れが屍を償ふことをゆるさん。曩に已に我が母にも太神の勅命ありき。案ずるにさきがた御身を導きしものも蓋し必や神なるべし云々。かくてアキリーズは從士に命じてくさくの償品を檢せしめさて其中より上衣と下裳とを取りいだしさて侍女に命じてヘクトルのなきがらを滌ひ淨めしめやがて更に香油を塗りて件の衣裳に裹ませさて後にそれを戦車に打載せ且ぬんごろに黄泉なるパトロクラスの靈を喚びて此の旨を告げさて後立歸りてプライアムに向かひていへらくさらば御身の情願の如くヘクトルの屍を引渡すべし。明日朝まだきに請取たまへと。かくて後晚餐の饗應をなし尙種々の談話の後アガメムノンの見出ださんことを恐れて態とプライアムの臥床を艦門のほとりに志つらひさておのがしゝ眠に就きぬ。さる程

に夜深けてマルキユリーの神忍びやかに入り来てプライアムを喚び起こし且竊にヘクトルの屍を盗みいだし難なく艦外に忍び出でしむ。

かくてプライアムはヘクトルの死骸を車に打載せて都門近く歸り來ればカツサンドラ女逸早くも之れを認め云々と市内を喚び廻るやがてトロイの男女悉く都門のほとりに集ひ來て泣きまどふ。プライアム之れを制しやをら車を牽入れ莊嚴なる王宮の殿上にヘクトルが遺骸を安置す衆皆其の傍に寄り集りて吊歌を唱ふ。號泣の聲天に達す。就中ヘクトルが妻のアンドロマキイは雙手もてヘクトルがなきがらの頭を抱きしめあぢきなや君は妾をば厭なき寡婦とならせて歸らぬ旅におもむき給ひぬ。あはれ此の稚兒のえもあひ立たぬ間に此の都は亡びやすらん。天地とも憑みてし君に後れまゐらせたる幸なき母子が行末の艱苦はそも如何ばかりならん。残忍なる仇人は此の稚兒をも捉らへて高閣の上より投げおとすらん。さるにても君が最後に御手をだに取るをえず又一生の紀念とせん御遺言だに賜はらで別れまつりし悲しさよどくりかへし打泣く。母后もまた打泣きてわが最愛の子よ神は死後までも汝を擁護し給へるぞ。宛然只の今

がたに死にたらんやうなる面影やどかきくどく。ヘレンもまた泣沈みて思へばわが身こそまづ死ぬべかりけれ御身に離れてはトロイの都は廣けれどもまた何人をか友とせん。なつかしき御聲をまたいつの日か聞くを得ん。あじきなの上かな。斯うしても御身を吊ふはやがて我身を吊ふなり。

“Ah, dearest friend! in whom the gods had join'd

The mildest manners with the bravest mind;

Now twice ten years (unhappy years) are o'er.

Since Paris brought me to the Trojan shore;

(O had I perish'd, ere that form divine

Seduc'd this soft, this easy heart of mine!)

Yet was it ne'er my fate, from thee to find

A deed ungentle, or a word unkind:

When others curs'd the authoress of their woe,

They pity check'd my sorrows in their flow:

If some proud brother eyed me with disdain,

Or scornful sister with her sweeping train,

Thy gentle accents soften'd all my pain.

For thee I mourn; and mourn myself in thee,

The wretched source of all this misery:

The fate I curs'd, forever I bemoan.

Sad Helen has no friend, now thou art gone!

Through Troy's wide streets abandon'd shall I roam!

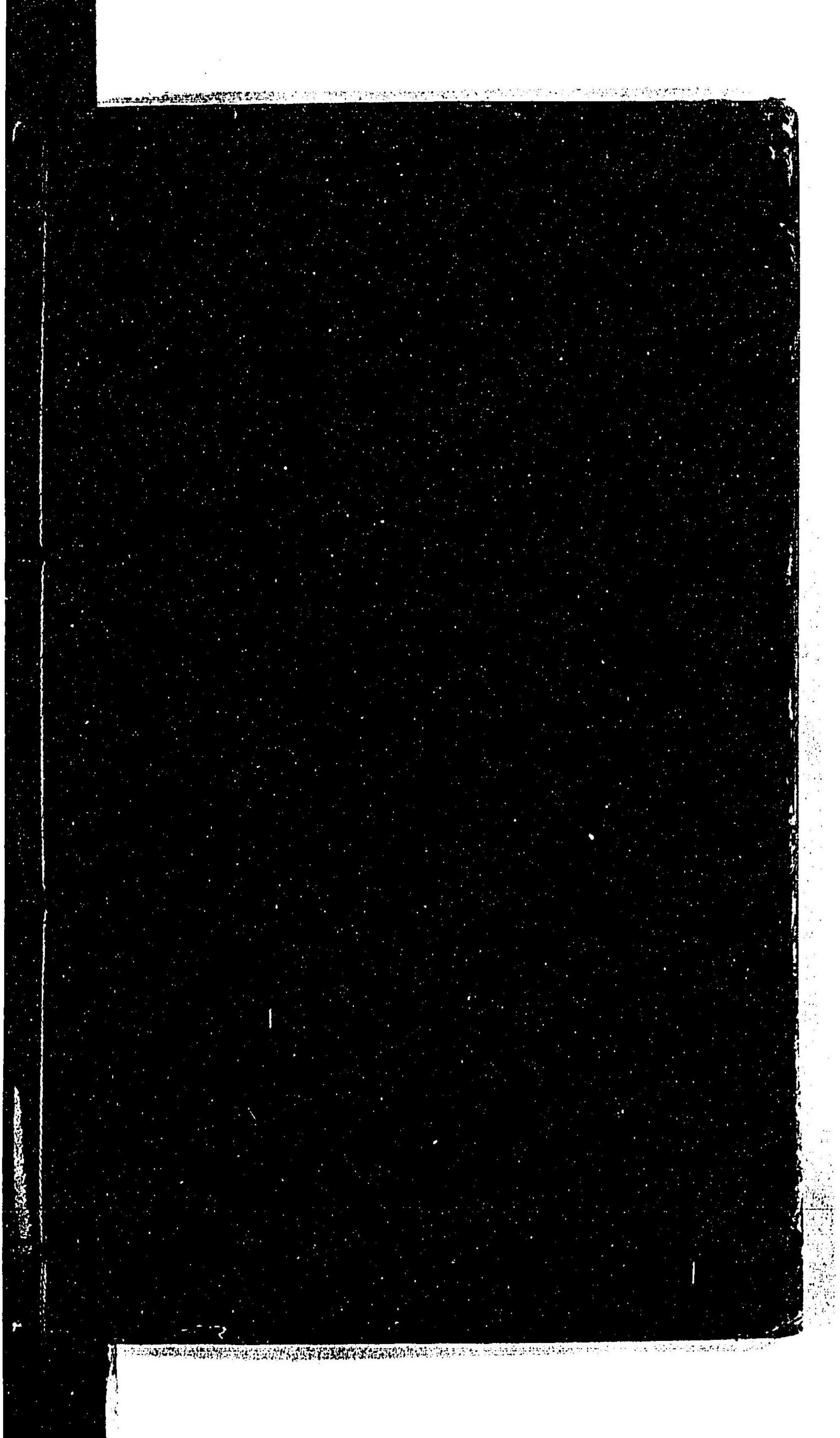
In Troy deserted, as abhor'd at home!”

さるほどにプライアムはトロイの民衆に下知していはく「汝等急ぎ木材を運び来たれ。敵の寄すらんを恐るゝなかれ。我れアキリーズと十二日目の朝までは休戦を約したれば」と。かくて十日目の拂曉となりければ木材を堆く積み上げ其が頂上にヘクトルの遺骸を載せて火をかけしり。さて朝日のさし出づるところには人々寄り集りて神酒を灑ぎて船を消し同胞從黨はなく／＼白骨を拾ひとりて黄金の器うつわに納めそを紫の紗もて被ひさて後深く墳坑の中に瘞め且其が上に一基の墓石を建て番卒をして之れをまもらしめてやがて肅々として列を正し王宮さして立歸り又更にいと嚴なる哀悼の宴をぞ催ふしける。

62
350

『イリアッド概観』終

邦語第二



205043-000-4

62-350

英文

坪内 雄藏/述

[刊年不明]

EDV-0036



350